

## [004]糟屋演習林植物調査

初島, 住彦  
九州帝国大学助手

<https://doi.org/10.15017/14203>

---

出版情報 : 九州帝国大学農学部演習林報告. 4, pp.1-267, 1934-01. 九州大学農学部附属演習林  
バージョン :  
権利関係 :

以上の理由により平均気温は之を示すこと困難なれば、本表には福岡測候所に於ける観測の同期間三ヶ年平均値を引用せり。

最高年平均気温は二〇・三六度にして最低は一〇・三五度之を福岡測候所の三ヶ年平均に比する時は其較差稍々大なり。

風向は頻度より見る時は東風最も多く南東風之に亞ぐ。静隠なる天候にありては海洋の影響を受くること多く概して夜間より朝間に亘りては東寄りの風吹き午後は西寄りに變る。暴風の方向は主として南東にして昭和五年七月十八日の颶風は風速實に二十七米なりき。降水量は年平均千五百九十一耗にして福岡測候所より百八十八耗多量なり。

湿度は福岡測候所より稍々小なるにも拘らず、蒸發量の反て大ならざるは周圍に於ける森林及風の影響なるべし。

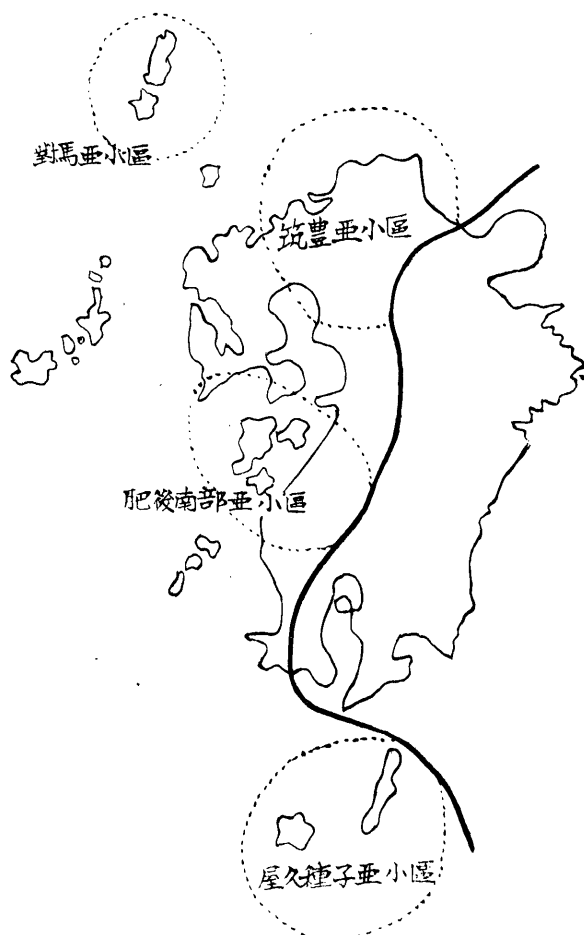
初霜は十一月上旬に見ることあり、晩霜は四月下旬に及び初雪は十二月中旬にして終雪は三月上旬なり。

## (二) 植物地理學上より見たる演習林の位置

九州は植物地理學上より見れば本州(小笠原諸島を除く)、四國、九州を包含する日本區の南端に位し南部は琉球、臺灣區の北端と相接し琉球、臺灣の植物に關係深きは勿論、遠く南支那、熱帶アジアの植物にも密接なる關係あり。北部並に北西部は朝鮮海峽を隔てて滿鮮區の南端と相接し、朝鮮、滿洲、支那北部の植物との關係深く、九州西南部は支那中部、ヒマラヤ方面の植物と一脈の連鎖ありて植物地理學上極めて興味多し。

著者は一つの線を設定し九州を中央より太平洋側と日本海側に縦斷し夫々太平洋側九州小區、日本海側九州小區に分かつを適當と考ふ。本縦斷線は大分、福岡兩縣の境界山脈より肥後、日向の界なる九州中央山脈に出で薩摩半島より南下し、種子島、屋久島の東方に出る線なり(第一圖參照)。

## 第一圖



## 九州植物區系區分圖

日本海側九州小區は滿鮮要素、支那中部要素を多分に包含することにより著しき特色あり。之に反し太平洋側九州小區は上記要素を含むこと前者に比し極めて少なきものなり。

日本海側九州小區はその構成要素により更に筑豊亞小區、肥後南部亞小區、屋久種子亞小區、對馬亞小區の四亞小區を區別し得るが如し。

筑豊亞小區は福岡縣の全部、肥後の北部、佐賀縣の北部を含む區域にしてカラスガマズミ、コナラモドキ、テリハコナラ、コバノテウセンエノキ、カラタニウツギ、コシデ、テウセンヤマツツジ、ケゲンカイツツジ、マンシユウハシドイ、ホソバマ

マコナ、ヒゲママコナ、ヒメヤナギ、エヒメアヤメ等満鮮分子を多数に包含す。

肥後南部亞小區は肥後南部、天草全島、長崎縣南東部を包含する區域にして支那中部要素を多分に有するを特徴とす。代表的植物はチクシムレスズメ、チャンテンモドキ、アイラトピカヅラ、ツクシカイドウ、ギンモクセイ、クマガハリンダウ、カラクサハギ、チクシガヤ(筑豊亞小區にもあり)、ウスユキクチナシグサ等にして九州以外内地に於ては未発見の種類なり。

屋久種子亞小區はタカネゴヨウ、クマガハリンダウの如き支那中部要素を有するも固有種極めて多く一亞小區として區分するを適當と考ふ。

對馬亞小區は場合によりては筑豊亞小區と一括して考ふことを得るも満鮮分子を更に多数有するを以て一亞小區と見做しても可ならん(九州の植物地理學的位置に關する詳細は他の機會に發表する豫定なり)。

以上より本演習林を考察するときは日本海側九州小區中の筑豊亞小區に屬するを知る。

### (三) 演習林の森林植生概説並に主要森林群叢

演習林は七團地に分かれ散在するを以て各團地によりて植生に著しき相違あり。殊に地質の相違による差異には相當著しきものあるを以て以下各團地に就きて森林植生の概況を述べん。

#### 新建團地

本團地は比較的永く人爲的攪亂を蒙らざりし爲本演習林中最も進行し稍々極盛相に近き觀あり。谷間は水分、光線關係良好なる爲、林床植物の發達は極めて良好にしてオホバノハチジャウシダ、クマワラビ、キノデ、カタキノデ、シロヤマシダ、オホヒメワラビ、シケンダ、ヒカゲワラビ、オホバノキノモトサウ、クリハラン、ハカタシダ、ミゾシダ、フモトシダ、ヤブソテツ、シラガシダ、タニイヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ホソバカナワラビ、シケチシダ、キヨタキシダ、イハガネゼンマイ、イハヘゴ等の羊齒類最も多く之等の間にはヒメウハバミサウ、ダイコンサウ、